

図書寮蔵紅葉山御文庫本目録 (三) — 子部 —

白井和樹

一、序

前稿に引続き、書陵部所蔵の旧紅葉山御文庫本（以下「御文庫本」）の目録を作成した。今回は子部を扱う。御文庫本の判定基準は前稿同様である。

二、子部図書

1. 概要

今回子部として認定・著録したのは凡て一六〇部一六一三二点（現存一五九部六一三六點）。うち『御書籍来歴志』所載のものは六六部一五三八五點（現存六五部五三八九點）。ちなみに『図書集成』は後述の如く明治の末に東京帝国大学に移管され、その後関東大震災で焼失した。なお『道蔵経』の員数欄は幕末の員数だが、昭和二十九年（一九五四）に購入本と統合整理されたので、員数に変更がある。また明治六年（一八七三）の皇居火災で焼失した数部は、現員数で著録し、『楓山文庫御書籍目録』の欄に幕末の員数を注

記した。

なお、御文庫本の子部については、特に内閣文庫本の医書・兵書を対象とした、上野正芳氏による輸入時期の研究があり、^①研究手法等参考になることも多いが、氏は図書寮本については原則扱わないので、紹介するにとどめる。一点だけ、上野氏の興味深い指摘について触れておく。それは、「中国において当時の新しい兵学の知識が、ほぼ時を同じくして日本に齎されて来ていると考えてよいのではないか。…さて以上のような考えが成り立つと、紅葉山文庫兵書に、清刊本がなぜ少ないのであろうか」というもので、同じことが図書寮本にも当てはまるか検討したところ、図書寮蔵御文庫本中兵書（兵家類および附存部韓人著撰類のうちの兵書）は全部で一六部であったが、その内訳は多い順に、清鈔本（推定含む）六部、朝鮮刊本五部、明刊本・明鈔本各二部、和版・江戸期写本各一部。鈔本も単純に数だけ計上すればよいものではなくやや複雑だが、清刊本は皆無であった。内閣文庫本と合わせても確かに清刊本は少ないことになる。一方、清鈔本が図書寮本の約半数であるのも気になるところではある（毎回指摘しているように、図書寮本は御文庫本のほんの一部に過ぎず、かつ『御書籍来歴志』を基準にするとはいえかな

り恣意的な選択があるから、数値としては平均値ではない傾向が強いことは記しておかねばなるまい。

2. 図書点描

① 陰騭文集訓

函架番号114-59

清〔李飛鋒〕撰、清乾隆三十二年（一七六七）序刊。線装・半紙本大・一冊。^②「陰騭文」とは、学問神だった文昌帝君が、宋代以降人間の禍福を司る神として庶民の間で信仰されるようになり、明末にその所説としてまとめられた道教経典。道徳的行為を列挙し、陰徳を積むよう促すもので、『文昌帝君陰騭文』が正式名称である。

本書は、清の李飛鋒による乾隆三十二年の序を持つ「陰騭文」の注釈書で、まず初二丁に「陰騭文」の全文を掲げ、その後九二丁をかけて各句に注釈を施す。豊後佐伯藩主毛利高標の旧蔵書で、文政十一年に幕府に献納された。

本書は大正十二年（一九二三）末に侍従職から図書寮に移管された図書群中にあり、そもそも明治二十四年の内閣記録局からの移管分に含まれていない。したがって、明治二十年代以前にすでに宮中あるいは宮内省の所管になつていたと考えられる。それゆえ、現在に至るまで侍従職より移管された他の普通書と一緒に架蔵されており、当部蔵の御文庫本のうち唯一貴重図書（貴重書・準貴重書）ではない（但、家別は「佐伯」毛利本）。

② 玄々碁経

函架番号403-64

宋晏天章・嚴徳甫編、元至正七年（一三四七）虞集再編、「明初」刊。線装・枳形大本・六冊。^③古典的な棋書（囲碁の本）として著名である。「玄々碁経（集）」とも称する。

第一冊は序に続いて宋張擬「棋経十三篇」として「論局篇第一」以下の囲

碁論や、古人の囲碁論が収録される。次いで第二冊以下は珍瓏（詰碁）が解説とともに載せられる。本文については、後述の元刊本や寛永の和刻本をもとに平凡社東洋文庫『玄々碁経集1・2』の二冊本として呉清源氏により「解説」とともに翻刻されているの^④とほぼ同内容であるが、御文庫本は流布本とは囲碁論の順序が異なり、未収の文もあるようだ。さて呉氏によれば、『玄々碁経』といえは、多くの人がただちに詰碁を連想する^⑤の^④だといひ、それゆえ氏は詰碁以外にも囲碁論などが編集されていることを本書の注目すべき点として挙げておられる。

ところで本書は、現在裏打が施され、袋綴線装となっているが、版式、丁付（といつても現況でいうところの半丁ごとに数えられている）からみて、もとは折帖だったものが改装せられて現在の姿になっているのではないかと推する。また現在の表紙は唐表紙と思しいから、改装は本邦ではなく唐土で行われ、改装後輸入されたのではないだろうか。

本書は享保八年（一七二三）の『官府書目』には見えないが、明和の『御書目録』第六冊卷之八藝術類の五十番に、

玄々碁経

元晏天章述

六冊

と見える。よつてその間の収録であろう。

なお、幕府関係の収録としては、国立公文書館（内閣文庫）に、当部蔵本よりも古い元刊本が蔵されるが（請求番号子66-1『玄々碁経集』一冊）、これは仁正寺藩主市橋長昭が昌平饗に献じた一冊である。

③ 三因極一病證方論

函架番号404-12

南宋陳言撰（淳熙元年（一一七四）自序）、〔室町期〕写。和装・大本・七冊。^⑤陳言は、序あるいは巻首にあるように、（処州の）青田（現在の浙江省

青田) 鶴溪の人で医者。それまでの諸医書を基礎として、医者に必要とされる知識「五科」(脈病証治因)のうち「因」を重視し、それを「内因」「外因」「不内外因」に三分、病気の原因はこの三因に帰結するとし、病気ごとに病証と治療の処方述べること一〇五〇余で、後世に大きな影響を与えたとされる。一名を「三因極一病源論粹」というとも言い、「三因方」と略される。該本も柱題を「三因方」とする。別に当部には、御文庫本ではないが元版が蔵されており(函架番号559-36、七冊)、医学館の旧蔵である。⁷⁾

なお、『御文庫目録』では「さ」項の寛永十五年(一六三八)以前からあった書物の一群の中に見え、『官庫書籍目録』第四冊「医書」の項に「三因方書本 七」とあるのがそれに当ると考えられるので(それ以外には、『官庫書籍目録』に見えず、『御文庫目録』からも新収の様子を窺えない)、幕初からの御文庫本と推測される。

『図書寮漢籍善本書目』では江戸初期写とし、目録・データベース・『図書寮典籍解題』では室町写とする。国立公文書館にある医学館旧蔵の写本(請求番号300-208、八冊)は吉田意庵旧蔵とされ、室町写本と思われるが、図書寮本はそれより時代がやや下り、写式等も異なる。意庵本は首冊に親本の封面と思しきものが写され、それには「南谿書院」の刊行といい、尾冊には多紀元簡が「此本与坊本有少異同、庚午五月購之以後/他日対勘(隔六格)元簡記」と朱書する。一方図書寮写本は写式が先に挙げた元版の版式と同じで、近い関係だと思われる。

④ 馬経全書 函架番号404-21

明兪彦校、明刊。線装・半紙本大・三冊⁸⁾。良馬の特徴、馬の飼育、特に馬の病気とその対処法・薬について図や韻文を交えて分かりやすく書かれてい

る。『馬経大全』と共通する部分もあるが、同一書ではない。

本書には、四顆の蔵書印が捺されるが、宮内省のものを除いた「吉日癸巳」「家在九峯高処」「松儔竹伴」の三印は、『帝鑑図説』(函架番号500-64、史部目録参照)と共通する。

『馬経』の名は、『御文庫目録』で寛永十五年以前および寛文十一年(一六七二)の両条に見え、前者は冊数不記、後者は「三本」と注記される。下つて『官庫書籍目録』には一部しか見えず、冊数は「三」というから、延宝当時は後者のみ存したものかと推する。これが本書だろう。したがって、本書は寛文十一年収儲と推定した。

⑤ 淳化閣法帖 函架番号511-38

折帖・一〇帖⁹⁾。宋王著奉勅原刻、本邦覆刻(後刷)本。『淳化閣法帖』は、内府所蔵の法書の名品を選択し、法帖として模刻させたもの。「泉州本」が著名で、それを明代・清代に翻刻したものが相当数残り、精粗も様々である。歴代帝王法帖(巻二)、歴代名臣法帖(巻二-四)、諸家古法帖(巻五)、王羲之書(巻六-八)、王献之書(巻九-十)から成る。現在当部の目録・データベースでは「清拓」とするが、おそらくは明清の刻本を日本で覆刻したものと推する。その所以は、(1)『礼記集説』『大明会典』『大学衍義』『法書要録』等と同様の浅葱色上繫文型押表紙であるため、疑いなく御文庫本であり、(2)『元治目録』に見える二本のうち、『来歴志』著録本(以下来歴志本)——後述のとおり豊坊等の蔵書印を有する——ではない方は、「国板」とあるためだ。当該書について、いち書物としてはそれ以上の問題は孕まない。要は来歴志本と誤認されて移管されたという、いわばありふれた¹⁰⁾はなしである。

ちなみに、先に述べたとおり『元治目録』には「国板」（和版）だというが、北川博邦氏によれば、和刻の淳化閣帖には五種があり、（1）寛延三年の題記・刊記を持つ寛延三年本、（2）寛政八年の柴野栗山の跋を持ち、他本だと各帖尾にある淳化の題記が卷一〇のみの水府本、（3）文化三年の跋を持つ文化三年本、（4）狩谷棧齋跋を持つ天保十四年本、および（5）いずれにも属さず異同の多い本があるという（北川「和刻淳化閣帖五種略説」〔若木書法〕八、二〇〇九年）。御文庫本はいずれにも属さない。すなわち、いずれの跋も有さず、著しい本文異同等も認められないのである。あるいは現在当部の目録・データベースにあるとおり、清刻本の可能性も視野に入れながら、いつどこで作られた刻本か再検討が必要になってくるだろう。

〔附記〕 蛇足ながら、問題は、来歴志本なのである。これは現在所在（存否も含めて）未詳だ——内閣文庫にも、東京国立博物館など他に御文庫本を蔵しているような機関にも所蔵されない。

『来歴志』にはその特徴を、「此帖極メテ精美ニシテ泉刻ノ如シ、帖中紅筆ヲ以テ旁注スル小楷亦精妙ナリ、趙孟頫・宋濂・豊道生ノ印記アリ、奇世ノ珍ト謂フヘシ、」（○『元治目録』のうち。読点等は筆者による。）と記し、これに続けて、印主不明のいくつかの蔵書印や宗恩（千利休の舅）・小出越中（尹貞）の花押があることを記す。「泉刻」というのは所謂「泉州本」を指すのだろう。

ところでこの来歴志本に「豊道生」すなわち豊坊の蔵書印があるという情報——現物を実見していないので真偽は未詳ながら——大変貴重な情報である。豊坊は書家としての名声が高いと同時に、偽経制作でも著名であることが全祖望『天一閣藏書記』により知られるが、¹⁰ことに囊祖豊稷が秘府より得たとする『河図石本』『魯詩石本』『大学石本』の三種の拓本類が豊坊の偽

造に係るといふのはこの『淳化閣帖』を考える上で示唆的ではないか。『淳化閣帖』自体を豊坊が偽造したのではないことは明白だが、趙孟頫・宋濂の蔵書印の偽造くらいはやっているようにも思われる。¹¹無論、豊坊や豊氏一族が蔵書家なのはそのとおりで、比較的良質の、あるいは伝来の確かな本が伝わっていても不思議ではないが、注意を要することを、指摘しておきたい。

⑥ 三命通会

函架番号554-57

明万民英撰、明万曆六年（一五七八）序刊（後印）。線装・大本・一二冊¹²。術数書。『四庫全書総目提要』には、「自明以来、談星命者、皆以此本為総彙、幾於家有其書、」云々とある。万民英は大寧都司茂山衛の人、嘉靖二十九年（一五五〇）の進士で（『皇明貢举考』卷之七）、他に『星学大成』という著作があり、育吾が字だという（『四庫全書総目提要』）。

本書には四庫全書本・排印本を含め数種の刊本があるが、本邦所伝のうち明刊本は図書寮本と静嘉堂文庫本の二部のみ、しかも静嘉堂文庫本は十万巻楼本、すなわち陸心源旧藏本を岩崎家が購求したものゆえ、図書寮本は近世日本に伝来した現存唯一の明刊本になる。延宝七年（一六七九）収録か（『御文庫目録』）。

さて、同版本としては、¹³国家図書館^{○台本がある}（索書号306.5-06589）。版式や刻工名、公開されている画像を参照すると同版本と考えてよいようだが、御文庫本に比してやや刷りが好いようにも見える。図書寮本は、後印本で、版木の状態も刷りも悪い。

⑦ 老子翼

函架番号555-12

明焦竑撰・王元貞校、明万曆十六年序刊。線装・大本・三冊¹³。焦竑は嘉靖二十年江寧（江蘇省、現在の南京）に生れ、万曆十七年の科挙で状元となり、

翰林院修撰を授けられ、皇長子（後の光宗（泰昌帝））の講官となったが、左遷された。博学にして泰州学派の羅汝芳・耿定向に師事、儒仏道三教一致の立場をとった。また、李贄（李卓吾）と親しかつたことでも知られる。蔵書家としても著名。

また王元貞については、すでに住吉朋彦氏が紹介されるように金陵の人で、字を孟起といい、出版などを行い、臥癡閣を建てたといひ（『金陵通伝』巻一八「李登伝」、詳しい伝記についてはさらに氏は地方志類に見える伝記史料も含め諸史料を示しておられる¹⁴）。住吉氏の整理に従えば、南京上元の富家の出で、南監の太学諸生として李登・焦竑らとの交友があり、万曆十五〜二十五年の間に『藝文類聚』『焦氏類林』（万曆十五）、『老子翼』『莊子翼』（同十六）、『新增説文韻府群玉』『王氏画苑』『王氏書苑』（同十八）、『詹氏性理小弁』（同二十四）、『館閣類録』（同二十五）の版刻に関わったという。

当『老子翼』に関わるところでは、王序末の「金陵徐智刻」との刊記で、同様のものが『藝文類聚』『新增説文韻府群玉』『王氏画苑』『館閣類録』に見出せるという。『老子翼』以外は「督刊」「督刻」との文言であり、住吉氏は刻工の「棟梁の立場から督刊と記したものと解される」とされる。従うべきである。所謂版元としての刊記は徐智のものとは別に「万曆庚寅歲夏五月王氏淮南書院重刊」（『王氏画苑』）とあるという。

さて本書を採上げた所以は、実のところ、御文庫本にも拘らず『元治目録』に見えない——正確には「老子翼」として単独の立項がない——からである。いま『元治目録』子部道家類の項を閲するに、『老莊翼』七冊がある。同じ焦竑の著作に『莊子翼』があるが、それと併せて七冊としていられるらしい。果して国立公文書館（内閣文庫）には目録で「楓」（楓山本）の符号を附し

たる『莊子翼』四冊があつて（請求番号子235-15¹⁵）、同じく万曆十六年序刊、実見すると版式も同じようであり、「共四冊」の墨書も『老子翼』の「共三冊」と同筆のように見える。題簽の色の有無の差こそあれ、如何にも当『老子翼』と一揃いとして整理されたものだったとみてよいように考えられる。そうだとすると該本も図書寮と内閣文庫との泣別れ本といつてよいかもしれぬ。

ところでいまひとつ気になるのは表々紙見返しにある「王孟起臥癡閣図書」印である。これは何であろうか。先に記したとおり、「王孟起」は王元貞、「臥癡閣」は彼の建てたという書庫の名である。あるいは蔵版印の如きものか。

三、古今図書集成のこと——各論（4）

『古今図書集成』といへば、清聖祖仁帝（康熙帝）の下令にて編纂が開始され、次の世宗憲帝（雍正帝）の代に完成した類書である。

紅葉山御文庫には吉宗のとき初めて絵図のみ輸入されたが、完本でないことから絵図は長崎に返却してひと揃いの輸入を改めて命じ、明和元年（一七六四）に全九九九六冊が入ったという（近藤重蔵『御代々文事表』元文元年（一七三三）条（『右文故事』巻一三））。この本は初刷本だったとされる¹⁶。

ところで、この『古今図書集成』（以下目録等に見える書名に従い『図書集成』と呼称）は、どのような経緯でこの世から姿を消したのか、その概略は古老の語るところとして伝わってはいるものの、¹⁷詳述されてはこなかったように感じる。そこで、今回は図書寮の史料を中心としてその様子を誌し、

御文庫本理解の一助としたい。

第六八号拙稿で詳述したとおり、御文庫本は、江戸城接收の後も明治十七年まで旧書庫にあり、その一部がのち明治二十四年に図書寮に移管された。

『図書集成』もそれに含まれていた。

目録類を閲するに、『元治目録』子部類書類に「図書集成 一萬巻／総目四十巻／銅板活字」九千九百九十六冊 清蔣廷錫等撰」とあるのがそれで、『紅葉山文庫書目』（明治三年）では子部百三十八番／百八十七番に「図書集成」とあり、全六百函から成ると書かれている。これが明治二十三年の『図書録』では「古文書目録（在来之分）二」の「子十号」に「右副」図書集成 九千九百九十六冊」と見えるから、明治に入ってから一冊も欠けずに伝わっていたことが判明する。

因みに、この『図書集成』についてはやや情報が混乱しているふしがあった。現在図書寮にある石印版五〇四四冊本（函架番号E4-1）が内閣記録局からの移管本のように記録されている場合がまま見られる。⁽¹⁸⁾この石印版は明治三十四年に明治天皇の特旨⁽¹⁹⁾で『図書集成』が東京帝国大学に移管される際、そのパーターとして侍従職から図書寮に移管（侍従職としては「御預ケ」されたものである。ついでながら補足しておく、この移管の際、もと東京帝国大学にあった『図書集成』——上海版一六二八冊——は、玉突き式⁽²¹⁾に明治三十五年六月、京都帝国大学へと保管転換された。

ところで、この東京帝大への移管時の目録（明治三十四年『図書録』所載）に「（五十箱）六百帙 九千九百九十五冊」（傍点筆者）とあるのが気に掛る。何時の時点で一冊消えたのか。あるいは目録の誤記とも思われるが、何せ現存しない以上、今以て謎である。

その後、関東大震災で焼失した。諸書に描かれる東京帝国大学図書館全焼の様子に鑑みれば、『図書集成』が一冊残らず焼亡したのも宜なるかな、である。震災当時、図書寮も辛うじて被害を免れたに過ぎなかったらしい——実際焼けた本も少なくない——ことを思えば、いずれに在っても同じ運命だったのではないかと思惟しないではない。

四、御文庫本の『大蔵一覽集』と『群書治要』——各論（5）

徳川家康の出版事業として名高いものとして伏見版と駿河版があり、前者が木活字、後者が銅活字であることはよく知られている。駿河版『大蔵一覽集』『群書治要』の刊行については『本光国師日記』に詳しく見え、これも重要なテーマだが、今回は姑く措く。さて、すでに川瀬一馬氏が記されるとおり、「駿河版の大蔵一覽集・群書治要の摺本の残部（と言っても大蔵一覽は百二十五部印刷の其の半分位が、又群書治要などは百二十五部殆ど全部である。）がその印刷器具の一切と共に盡く紀州家の所蔵に歸してある事だけが判明して」おり、「元來は、この駿河版の摺本も特に道春が三家へ一部宛駿河文庫本に添へて分つていたのを見ると⁽²²⁾水戸尾張兩家に、紀州家へも各一部だけ分譲せられたものに相違なかつた」が、家康没後駿府城主となった頼宣が和歌山転封に際して一緒に持って行ったとされる。⁽²³⁾ところで、両書は当然に幕府（御文庫）にも蔵されていたようだが（『官庫書籍目録』、江戸前期にはすでに失われていたと思しく、⁽²⁴⁾近藤重蔵の『御代々文事表』卷五（『右文故事』卷一三）元文五年七月廿五日条に「是ヨリ先、紀州ヨリ御取寄アリシ慶長活字銅版群書治要部、大蔵一覽二部、御文庫へ納メラル方日記」とあ

る(○近藤正)。この記事にある『日記』元文五年七月二十五日条は次の如し。
(齋全集二)

一、遠江守殿御用在之由、御目付中々来書、罷出候処、左之御書物新規
ニ御預ケ、請取之、長持へ入候而東御藏へ入置申候、

群書治要 活字板 四十七冊 一箱 …… (a)

茶鳥子表紙・糸もへき・外題なし

同 四十七冊 一箱 …… (β)

赤和表紙・白紙外題末書付なし・糸もへき

大蔵一覽 十一冊 一箱 …… (γ)

茶鳥子表紙・糸紫・白紙外題書付なし

同 十一冊 一箱 …… (δ)

紺鳥子表紙・糸ちや・白紙外題書付なし

…… (後略) ○大日本近世史料(便宜常用字に改む)、
a以下の記号符号等は筆者による。

ところで近藤重蔵は、『右文故事』巻之五で、「有徳院殿入テ大統ヲ繼セ玉
フニ及ンテ、銅版刷印ノ群書治要、大蔵一覽等紀府ニ數部存スルヲ以テ、各
二部ヲ召テ御庫ニ収メラルトアリ、御文庫日記ニ據ニ、元文五年七月廿五日、
群書治要二部、大蔵一覽二部(現存三部アリ)、新規御預被成候旨、遠江守
被申渡候トアリ、」と書いていて(傍線筆者)、近藤が御書物奉行だった一九
世紀前半にはすでに『大蔵一覽集』が図書寮に移管され現在も存するように
三部あったのである。この三部の『大蔵一覽集』のうち、どれが吉宗により
移入されたものかは、先の『日記』の記述に即して検討すれば明らかだ。

『群書治要』では(a)が404-28、(β)が404-29、『大蔵一覽集』では
(γ)が404-31、(δ)が404-30にそれぞれ該当する。

このように当時の面影を伝えている点でもこれらの書物は貴重である。

五、『官庫書籍目録』についての覚書——各論(1)の補

1. 小序

先年、本誌第六八号中の拙稿(以下本章で前稿とするのは全てこれを指
す)第三章で、鶴見大学図書館蔵『官庫書籍目録』について紹介したが、同
目録が紅葉山御文庫全体の目録に非ずして、あくまで桜田御本の目録である
などの御意見があるようであり、同じ方から説明不足だとの御指摘もあつた
と聞いているが、後者は尤もであつて、紙幅の都合上、あるいは別稿を期し
ていたから、結論のみを記すに止めてしまった感は否めない。これは他にも
同様の感想を持たれた方もあろう。そこで少々補足して責を塞ぎたく存ずる。

2. 『官庫書籍目録』を読む

書誌については、前稿注(25)で詳述したからここでは省くが、問題はな
ぜ御文庫全体の目録なのかという点に尽きると思われる。前稿に記せるとお
り、注記からいずれの部分も享保元年(≡正徳六年)以前の成立なのは明ら
かだということを前提した上で以下、その理由について順に述べてゆく。

① 副題から

この目録には各冊ごとに副題があり、それぞれ所載の書物の内容(分類や
来歴)を示すが、まず(A)内容で分類されている部分(五冊)と、(B)それとは
混じらぬようコレクションのままの部分(尾一冊)に大別できる。(A)が享
保元年時点での、ある書籍群と、「桜田御文庫」+「御小納戸本」という
グループ分けである。(B)(尾冊)のさらに一部の内題(現状では内題という
よりむしろ篇名・副題と称すべきだろう)「桜田御文庫書籍目録」が(A)(B)

の全体を規定するとは看做せないで、『書物への愛 桜田御文庫と新井白石』の、当該目録全体が桜田御文庫の目録だとの説は否定されるだろう。

次でこの①、ある書籍群が何に当るかが問題となる。

② 著録図書から

筆者は、御文庫の目録と思しき本を見出すと、いくつかの特徴的な図書が著録されているかを確認し、判定している。次にいくつか例を掲げてみよう。

a 『四書白文』（姜立綱写） 〓 図書寮蔵『四書白文』（函架番号506-32）

明姜立綱写の特大本『四書白文』八冊。『紅葉山文庫日録』所載。

β 『史記』（四三冊本） 〓 図書寮蔵『史記』（函架番号401-86）

三条西実隆写（時期により藤原英房／万里小路秀房／三条西公条写とされることもある）。駿府御文庫本。

γ 北条本『吾妻鏡』 〓 国立公文書館蔵『吾妻鏡』（請求番号特103-1）

後北条氏旧蔵で黒田氏を経て徳川氏の手へ帰したとの伝承を有する五一冊本の『吾妻鏡』。

これらの図書は江戸前期までに入庫したもので、江戸期を通じて御文庫にあったとみて差支えないし、ごく初期の寒松和尚の目録なるものは存否未詳でよく分からぬから姑く措くとして、現存の全ての御文庫の目録に（目録それ自体に欠巻がなければ）著録されているはずである。

翻って本目録を確認してみると、①にもa、γの書名が見えるので、この一群は御文庫の、特に全体の目録と考えることができる。また②部の図書は瞥見すれば、駿府御文庫本・慶長御写本・寛文御写本や『御文庫目録』から江戸前期以前にの収録が明らかかなものばかりなので、「原・紅葉山御文庫」の収書目録だと判断できる（『御文庫目録』との関係は後述）。

③ 書籍群のグループピング

一方③ではどうだろうか。『日記』などから桜田御本と確定できるものが、どの部分に収録されているか見てみたい。試みに『日記』の『大日本近世史料』既翻刻分のうち、「桜田御本」等の注記のあるものを拾い、明和の『御書目録』で「文昭院様御前ヨリ出候由」と注記せられたる七部も加えて『官庫書籍目録』と突合せたのが表1である。（和板『通鑑綱目』一〇六冊のみ重出）。全体的な傾向として、「桜田御本」は桜田御文庫本・家宣の御小納戸本の総称であり、三部を除いていずれも③（『官庫書籍目録』第六冊）に属することが見てとれる。

この三部はいずれも『官庫書籍目録』の第六冊に見えないばかりでなく、第一―五冊のいずれにも見えない。『官庫書籍目録』不見のものは、書写の過程での誤脱（誤写というよりも脱落・脱丁だろう）の可能性ももちろんあるけれども、目録全体に見えないところを見ると、時期を違え、その後「御預け」になった可能性も考えた方がよいだろう。

以上縷々述べてきたが、少なくとも言えることは、桜田御本（桜田御文庫本と正徳期の御小納戸本）で、かつ目録に著録されたものは、第六冊にしか見えないということである。

以上より④が桜田御本とはいえないとはっきりと結論づけられ、さらに⑤だけが家宣（および家継）関係の書物群だと確認された。

④ 小括

かくして④が御文庫本目録だと結論づけたところで、次にこれがいつの編纂に係るかが問題である。目録成立の下限は正徳六年（一七一六）以前であり、さらに先にも記した寛文御写本の存在から、寛文以降の編となる。また

「官庫書籍目録」との書名は、『寛政重修諸家譜』の、延宝目録の編者のひとりだった林鳳岡の条に見える「官庫書籍の目録」という文言と近似する。前稿でも掲げた森潤三郎・福井保両氏の整理に従えば、延宝八年原成立と結論づけられる。

⑤ 〳附点本〴について

ところで④の各冊を通して閲読すれば、書名下に数字や点(、)の附されているものがあることに気付く。例えば、

四書大全四 二十冊〇十九〇廿□ (第一冊2才) ∴ (1)
五経大全、、 八十〇六十七〇六十四 (第一冊2ウ) ∴ (2)
古今名将伝、、、 十七〇十二部 (第四冊28才) ∴ (3)

の如くである。すぐに書名下の数字ないしは附点の数が、下に書いてある冊数表記の数、すなわち部数と合致していることが分かる。(1)(2)のように各圖書の冊数が異なっているものもあれば、(3)のように同じ冊数のものをひとまとめに表記しているものもある。なお、(1)が点の数でなく数字表記なのは、目録の冒頭だからと考えられる。

このような同名書の複数ある本をここでは仮に「附点本」と呼ぶことにするが、この附点本が本目録に存在する理由は何であろうか。

それは——この目録の編纂過程にも関係してくるものと思いが——形態の相違など特別な場合を除き、ひとつの書名に対して同名書を寄せて整理する目録の編纂法によるものだろう。したがって延宝目録は、ある時点編纂したものに加筆して用いた、あるいはそれを前提として編纂した、実用的な目録であったと想定される。

⑥ 『御文庫目録』との関係

それでは、すでに大庭脩氏により紹介せられた『御文庫目録』と本目録の関係は如何。

『御文庫目録』は収録年次と冊数が分かる点が貴重である。すでに史料紹介された大庭氏自身により、聖堂文書——長崎聖堂祭首・長崎の書物改役だった向井氏旧蔵文書——中にあった「寛永十六年己卯 御文庫目録」と始まる文書(整理番号三七〇―三八)と『御文庫目録』との強い関係と、同時に書物の部数の誤差が初期(寛永末年頃)と末期(享保初期)に多いことが指摘されている。また瞥見すると、加えているは別分類なので各年の項目数が一様なはずもなく、加えているは別にかなり内容に精粗があるようであるが、『官庫書籍目録』と『御文庫目録』を対照させてみたところ、かなりの割合で一致した³⁰⁾。特に御文庫収録本には他に見かけない書名の本が相当数あって、同定するのは比較的容易なのである。

⑦ 構成について——とくに③を中心に——

本目録の構成について、『書物への愛 桜田御文庫と新井白石』においては、第一冊～五冊が既整理の、第六冊前半「桜田御文庫御書物目録」が未整理の、それぞれ桜田御文庫の目録とし、第六冊後半を御小納戸に關係する未整理本と解するが、先に見たとおり、首五冊(④)は紅葉山御文庫全体の目録とみるべきである。また、『書物への愛 桜田御文庫と新井白石』で第六冊(⑤)を未整理とする根拠は複数の書名の上に掛けられた弧状の印で、これを未整理の証左とするが、果してそうだろうか。むしろこの印は、同じ函に収められた一群を指す印とみるべきではないか。本の形をしているものは大概二・三部が印でまとめられているし、それ以上でまとめられているのは冊数が少ないか、一枚物と思しきものが多いようである。より決定的なのは

「御小納戸ヨリ御預御書物目録」の項の第一・二・五・六番で、それぞれ、

(小学)	近思録	一帙	○第一番、冊数不記
(文徳実録)	三代実録	一帙	○第二番
(聖門志)	闕里志	一箱	○第五番
(四書)	五經	一箱	○第六番

とある。内容的にも近く、帙・箱でまとめられ、未整理とは考え難い。但、これら⑧の一群が前段(A)に「附点本」として追加されるのではなく、截然と区分されている意味は考えねばならぬが、前述の如く編纂時期の差でもあろうし、桜田御文庫本の新御蔵への別置とも無関係ではなからう。

さて編纂時期について、原・『官庫書籍目録』とでもいべき(A)は先に示したように延宝八年と考えるが、⑧は如何だろうか。これに関し、前稿執筆時に見落していた記事が『日記』中あったので紹介する。まず、享保元年七月二十六日条に、「一 御小納戸御書籍目録・桜田御書物目録・当五月御預之書物目録扣、都合三冊、」(○大日本近世史料による。傍線筆者)とあり、さらに同日条の二つ前の項に、「先月金兵衛殿被差上候御小納戸・桜田目録、…新御蔵二有之候右扣目録二、先頃出羽守殿(森川俊胤)御書付被遣候御書物、且又、新井筑後守返上之御書物等書加、銘々張札いたし候、」(○同)とあって、新井白石の件は不明であるが、月光院云々のハリ紙痕(と筆者が看做したもの)はこのときのものかもしれない。それというのも、森川俊胤は、綱吉・家宣の側近でもあったが、吉宗の初期にも若年寄として用いられ(書物奉行は若年寄支配)、正徳六年五月には月光院の新殿造作などを担当したというからである。⁽³¹⁾

したがって、第六冊はいずれの部分もこのときまでに現在の形になってい

るとみてよいだろう。「張札」の存在からみて、桜田御本とともに新御蔵に別置されていた「扣」の都合三冊が、並び順を異にして一冊に書写されたのが、現在の第六冊と考えられる。

3. まとめ

繰返しになるが、本目録の性格を改めて確認してみたい。

(ア) 著録される図書から見て御文庫全体の目録である

(イ) 注記から目録全体の成立の下限は正徳六年(享保元年)

(ウ) 書物群のグループピング・内題から見て桜田御文庫本や御小納戸本は一部に過ぎない

(エ) 前項に関連して、桜田御文庫本・御小納戸本の目録である第六冊と截然と第一～五冊は区別されるから、それぞれ編纂時期を違えると考えられる

(オ) 第一～五冊は正徳六年以前の御文庫の目録であり、外題も『寛政重修諸家譜』に見えるものと近似するので、延宝目録と判断される

以上から、特に第一～五冊の部分について陳べれば、紅葉山御文庫全体の目録で、第六冊の桜田御文庫本・御小納戸本とは異なる一群を扱い、随時追加・増補されている。したがって公式の御文庫目録ということになり、時期的に第一～五冊は延宝の目録の可能性が極めて高い結論づけられる。また、第六冊は『日記』の記述から、各部別冊として成立した三冊があり、その「扣」に「張札」されたものが祖本だった可能性が極めて高い。

(集部に続く)

註

(1) 上野正芳「江戸幕府紅葉山文庫旧蔵唐本医書の輸入時期について」(『史泉』五一、一九七七年)・同「江戸幕府紅葉山文庫旧蔵唐本兵書の輸入時期について」(『史泉』五二、一九七八年)。本文では兵書についてのみ触れたが、医書についての考察にも興味深いものがある。参照されたい。

(2) 『陰陽文集訓』の書誌は以下のとおり。

清〔李飛鋒〕撰、清乾隆三十二年序刊。線装・半紙本大・一冊。香色無地表紙 25・2×16・6 (康熙綴)。左肩双辺刷題簽「陰陽文集訓」15・3×3・3。封面「陰陽文集／訓輔仁會全人」(匡郭四周双辺、蔵版印カ押捺)。李飛鋒乾隆三十二年序(四周双辺無界8行14字)二丁。本文四周单辺無界10行21字、漢文、楷書体、

圈点・傍点・傍線あり、版心白口下向单黒魚尾(上象鼻中「陰陽文」、丁付は中縫中に陰陽文部分「一(一)」、注釈部分「一(九十二)」○途中「五十四」は文字欠ける(版木欠け、ないしは刷りが悪いか)。朱方印「樊／白子」(篆文陰刻) 2・2×2・1 (題簽上)、佐伯

毛利①・「御府」・宮内省図書印①印。図書寮ラベル、丸ラベル(626)。小口書「陰陽文集訓」。大正函号120-76、旧函号113-373。

(3) 『玄々基経』の書誌は以下のとおり。

宋晏天章・嚴徳甫編、元至正七年虞集再編、〔明初〕刊。線装・枳形大本・六冊。〔改装〕香色無地唐表紙30・5×26・2 (四ツ目綴、茶色角裂存)。左肩無辺題簽墨書「玄玄基経」一(一六) 22・0×4・4。首冊のみ前遊紙二丁(「子六十六」○「紅葉山文庫書目ノ番号ト」致)。「玄玄基経序」(至正七年虞集) 二丁半、「奕序」(至正九年歐陽玄) 一丁分、「基経十三篇目録」半丁、「伝曰、飽食」○「論陽貨」半丁、

至正九年晏天章序一丁分(以上すべて四周双辺有界12行15字)。版式四周双辺有界12行18字(24・9×23・1)。楷書・漢文、符号等なし。注小字双行。もと折帖

と思し、現在の半丁毎に左下隅に数字が振られ(首冊は序より「礼乙(一四九)」、版心がない。第二冊〜尾冊はほとんど全て図(棋譜)——四周双辺、版面中央に盤面の図、周囲に文章を配する(無界)。第二冊、楽一〜四八。第三冊、射一〜五十。第四冊、御一〜四四(文のみの折あり)。第五冊、書一〜四二。第

六冊、数一〜数四六止。各冊とも後遊紙なし。刊記等なし。朱方印「東路招討鏡山之章」(篆文陰刻) 6・3×6・1 (首冊首)、朱方印「白淵堂」(篆文陰刻) 3・2×3・2 (目録・尾冊尾)、秘閣図書之章①・帝室図書之章⑤印(ともに各冊首)。図書寮ラベル。

(4) 吳清源解説『玄玄基経集1』(平凡社、一九八〇年)、同『玄玄基経集2』(同、同年)。「解説」は第二冊所収。

(5) 『三因極一病証方論』の書誌は以下のとおり。

南宋陳言撰、〔室町期〕写。和装・大本・七冊。〔改装〕香色無地表紙28・6×21・0、表紙右下隅冊次墨書「一(一七)」。左肩双辺題簽「三因極一病証方論」一(一七止) (印刷枠内墨書) 21・1×3・7。各冊前遊紙1丁。淳熙元年陳言自序

1丁(四周单辺有界10行18字前後、柱飾なし、訓点あり)、「三因極一病証方論總目」二二丁(写式本文同然、柱題「三因方目」、柱題下丁付「幾丁」、朱符号あり) (序・総目で首冊を構成)。内題「三因極一病証方論卷之一(一十八)」。巻首

「青田鶴溪陳言無擇編」とあり。本文写式、四周单辺有界13行23字、句読朱点朱引朱符号あり(第二冊のみ途中で朱筆無くなる)。誤脱字は頭書・傍記にて訂正・補記。本文は数筆より成るが、柱は一筆(第二冊書写者と同一か)。白口黒

四角魚尾○押捺カ、中縫中墨書「三因方」(幾之)「幾丁」(巻十のみ魚尾なく)「三因十一七」などと墨書。尾題「三因極一病証方論卷之一(一十八終)」。各冊後遊紙二丁。奥書・識語等なし。帝室図書之章⑤印。図書寮ラベル。

(6) 『世界大百科全書』「三因方」の項。

(7) なお医学館旧蔵書には、他に写本がある(国立公文書館蔵。請求番号300-208、八冊)。国立公文書館にはいま一つ多紀元信手校という写本がある。

(8) 『馬経全書』の書誌は以下のとおり。

明龔彦校、明刊。線装・半紙本大・三冊。薄茶色無地表紙24・1×15・4、左下隅冊次墨書「一(一三)」。左肩黄色無辺題簽墨書「馬経」一四 共三冊(第二冊「馬経五之九」、第三冊「馬経」終) 14・0×3・3。封面あり(四周双辺有界)「龔自容先生論著」(界線)「圖像馬経／全書本術蔵板」、封面上朱印二顆。天啓四年(一

六二四) 俞彦「馬經全書序」(四周单边有界5行12字(20・3×13・5)、四丁)。「馬經目錄」(版式本文同然、三丁)。内題「馬經」。四周单边有界9行20字(20・3×13・5)、上白口单下向白魚尾(上象鼻中柱題「馬經」、中縫中篇名・丁数)。楷書・漢文、句読点訓点なし。注小字双行。間々図あり(上図下文等)。尾題なし。跋等なし。刊記・奥書・識語等なし。朱方印「吉日/癸巳」(篆文陰刻、匡郭・界線あり) 5・0×4・8。朱長方印「家在九/峯高處」(篆文陽刻) 4・2×2・1(天地逆に押捺)。朱方印「松儻/竹伴」(篆文陰刻) 4・5×4・4。帝室圖書之章⑤印。図書寮ラベル。小口書なし。

(9) 『淳化閣法帖』の書誌は以下のとおり。

刷本。折帖・一〇帖。後補浅葱色正繁文型押表紙24・0×11・4。左肩砥粉色無辺題簽墨書「淳化法帖 壹」の如し、19・3×3・1(首二帖、「淳化」〇損じてを朱筆にて「淳和閣」と改む)。前見返銀切箔。内題「歴代帝王法帖卷一」「歴代名臣法帖」「歴代名臣法帖第三(〜四)」「諸家古法帖五 蒼頡書」「法帖第六 王羲之書一(〜第七王羲之書二)」「法帖 晋王羲之」「法帖第九 晋王獻之一(〜第十 晋王獻之)」。各折行数字数不定。化粧断痕あり。間々丁付あり。尾題なし。各帖末尾原刻記あり「淳化式季壬辰歲十壹/月六日、奉/聖旨模勒上石」(原篆文)。刊記等なし。宮内省図書印①印。図書寮ラベル。

(10) 豊坊の伝記などについては近藤一成「宋代中国士人社会研究の課題と展望」(『文部科学省研究補助金特定領域研究(平成十七〜二十一年度) A02科挙班「中国科挙制度からみた寧波士人社会の形成と展開」研究成果報告」二〇一一年)・同「豊氏一族と重層する記憶」(『文化都市寧波』東京大学出版会、二〇一三年)。(11) 上海博物館蔵本は北宋拓とされるが、まさにこの本に趙孟頫の蔵書印があるという(東京国立博物館・朝日新聞社編『書の至宝』(朝日新聞社、二〇〇六年(図録)、三一九ページ)。このような本が豊坊蔵本の祖本か。

(12) 『三命通會』の書誌は以下のとおり。
明万民英著、明万曆六年序刊。後印。線装・大本・一二冊。薄茶色無地切付表紙25・1×16・8(二本取)、右下隅に冊次墨書「一(〜十二止)」。左肩打付書「三

命通會全書」、外題上朱印「家在九峯高處」押捺。万曆六年季秋万民英「三命通會序」(自序)。内題「三命通會卷之一(〜十二) 育吾山人著」。四周双边有界10行22字(20・6×14・8)。句読点等なし。注小字双行。第二・七・一一冊に朱筆書入あり。版心は白口单下向黒魚尾(上象鼻中「三命通會」、中縫中「〇一卷

二 敬」の如く巻次・丁数・刻工名あり。なお、第七冊のみ刻工名と字数を記すが、本冊のみ各行の字数が一定しないためと思しい。また刻工名を欠く丁・冊もあり)。一部版面に割れが見られる。刻工名としては、判読可能なものだけでも、敬・才・春・升・刘・肖・儒・丁・張・義・陳・位・王・乃・人・應・縉・圣・大・太・科・鬼・廷・魏・明が見出せ(「某刊」との表現も)、これらを複数組合わせた「位圣刊」「位科」「科丁刊」「魏應科」などもあるが、字が潰れてしまっているもの等も多い(国家図書館本の書誌データに「魁」という刻工名が見えるので「鬼」は「魁」かもしれぬ)。第一〇冊第七四丁欠(白紙補入(但、第七五〜六丁間に誤る))。尾題「三命通會卷之一終」「三命通會卷之二(八・九・十二)終」「三命通會三(〜七・十)卷之終」「三命通會十一卷終」(墨打)。
万民英自跋「三命通會跋 育吾山人著」。刊記・識語・奥書等なし。朱長方印「家在九/峯高處」(篆文陽刻) 4・2×2・2(外題上)、朱方印「玩易/樓藏書」(篆文陽刻) 4・7×4・8、帝室圖書之章⑤印。図書寮ラベル。小口書「子(〜亥)」「冊次」。背に化粧断痕あり。首冊裏見返に内閣野紙を切り「一二子五九」と墨書せる附箋(一二冊、子部第五九番の意ならん——果して『紅葉山文庫書目』子部第五十九番に「三命通會十二冊」とあり)。

(13) 『老子翼』の書誌は以下のとおり。
明焦竑撰、明万曆十六年序刊。線装・大本(縦長)・三冊。支子色無地表紙28・4×15・8(左下隅「共三冊」墨書、押八双あり)。左肩浅葱色单辺題簽「老子翼天(・地・人)」16・9×3・6(墨書)。内題「老子翼卷之一(〜三)」。左右双边有界10行20字(19・9×12・8)、版心白口下向单黒魚尾、上象鼻中「老子翼」、中縫中「卷之一 幾」の如し。漢文、楷書、句点あり、注小字双行。天・七四丁(うち万曆十五自序四丁、万曆十六元貞序二丁、目錄・書目五丁)、地・

六六丁、人・六二丁。尾題「老子翼卷之一（・三）」「老子翼卷之二終」。王序末に「金陵徐智刻」との刊記。秘閣図書之章①・宮内省図書印①、朱方印「王孟起臥／癡閣圖書」（篆文陰刻）2・9×2・2。図書寮ラベル。下札。

(14) 住吉朋彦「韻府群玉」版本考（四）（『斯道文庫論集』三八、二〇〇三年）。以下本項に関する氏の見解は原則同論文に拠る。

(15) 内閣文庫本『莊子翼』の書誌は以下のとおり。

国立公文書館蔵。請求番号子2515。明焦竑撰・明王元貞校、明万曆十六年序刊。線装・大本・四冊。香色無地表紙28・5×16・0（押八双あり）。左肩無辺題簽墨書「莊子翼 元（・亨・利・貞）」16・9×3・0。「莊子翼叙」（万曆十六焦竑自序）・「莊子翼叙」（万曆十六王元貞序）、「莊子翼目錄」「莊子翼採書目」「讀莊子」（凡例）あり。内題「莊子翼卷之一（〜八）」。本文版式、左右双辺有界10行20字（20・0×12・9）、楷書・漢文、句点あり、注小字双行。版心白口下向単黒魚尾、上象鼻中「莊子翼」、中縫中「卷之幾 幾」。朱筆書入あり。尾題「莊子翼卷之幾」（第一・三〜六卷）、「莊子翼卷之幾終」（第二卷）、「莊子翼卷之幾終」（第七卷）、「莊子翼附錄終」（第八卷）。秘閣図書之章①印。旧縦長ラベル（大学カ）・現内閣文庫ラベル。函号下札。小口書なし。表々紙左下隅（外題下）「共四冊」墨書（図書寮本『老子翼』「共三冊」墨書と同筆カ）。

(16) 福井保『紅葉山文庫』（郷学舎、一九八〇年）・東京大学附属図書館『東京大学総合図書館の漢籍とその旧蔵者たち』（図録、一九九五年）。

(17) 石田幹之助の話として大庭脩氏が書留めている（『漢籍輸入の文化史』）ほか、『紅葉山文庫』『東京大学総合図書館の漢籍とその旧蔵者たち』や東京大学東洋文化研究所図書室編『はじめての漢籍』（汲古書院、二〇一一年）にもほぼ同様の記述がある。

(18) 一例としては『宮内省 図書寮貴重書目録』（函架番号一〇一―一四七、一冊）が挙げられる。本書については改めて紹介することとした。

(19) 明治三十四年『図書録』（識別番号990278）の記事に「特旨」とはなすが、大正十二年『図書録』（識別番号990289）所載の焼けた際の報告書

（古在東京帝大総長より関谷宮内次官あて）に「特旨ニヨリ：御下賜」と見える。

(20) この移管の詳細な経緯は次のとおりである（以下『図書録』明治三十四年第三号文書による）。明治三十四年九月十三日に清国専使欽差大臣那桐が、清徳宗景帝（光緒帝）からの贈物のひとつとして持来った（○本件については『明治』『圖書集成』を図書寮に「御預ケ」するので、従来図書寮主管の『圖書集成』（＝御文庫本）は文部省へ御下付となる（同年十月二十二日）。侍従職より（石印版）『圖書集成』查收（十月四日）^{〔十一月ナラン〕}（御文庫本）『圖書集成』引渡しにつき文部省に照会（十一月十五日）、同省より東京帝大備付とする旨伝達あり（同日）。図書寮としては何れの日でも差支えないので東京帝大図書館員が来れば引渡す旨回答（同十八日）、二十一日には引渡完了したので受領書を回送するよう図書寮より文部省総務局図書課に依頼している。

(21) 『京都大学附属図書館六十年史』（同館、一九六一年）八〇ページ。

(22) 「図書寮と帝室博物館の思い出」（『日本歴史』第一九五号。当時の杉栄三郎 図書頭の回顧談）や、堀口修「関東大震災と図書寮」（『宮内省の公文書類と図書に関する基礎的研究』）に詳しい。

(23) 川瀬一馬『日本書誌學之研究』（大日本雄弁会講談社、一九四三年）六〇二〜〇三ページ。

(24) 前稿（史部）で享保八年の目録とみた『官府書目』には「群書治要^{和板}二部 四十七冊」が見え、金沢本およびもう一部別の本（ともに員数四七）とともに載る。別本は慶長写本と思われるが（国立公文書館蔵、請求番号別4011）、この当時駿河版以外に刊本はないので（尾崎康「群書治要とその現存本」（『斯道文庫論集』二五、一九九一年）、「和板」と注されたものは当然駿河版である。今回採上げた二部は本文で詳述のとおり元文五年に移入されたものだが、例の二部との関係が気になるころではある。

(25) 『書物への愛 桜田御文庫と新井白石』では『新井白石日記』宝永三年十月二十九日条に当該北条本が見えることに触れて、「家康・秀忠時代に集めた貴重な書物が家宣の書物好きとともに桜田御文庫に入れられた歴史を物語る。」と書

くが、全く根拠が分からない。当日条に北条本が載せられていることが見える
「御本丸御書籍目録」は文字通りあくまで御本丸の書籍、すなわち当時の將軍綱
吉の蔵書——御文庫本——の目録である。

(26) ことに北条本『吾妻鏡』について、『書物への愛 桜田御文庫と新井白石』
では『官庫書籍目録』全体が桜田御文庫の目録という前提に立って、本目録所載
だから本書が家宣旧蔵書だとするが、我田引水というべきである。むしろなぜ同
書が本目録に載っているのかについて考えるべきだったろう。

(27) これらは『御本日記』等に書名が見える。

(28) これらも『御本日記』等に書名が見える。慶長御写本については拙稿「『玉
葉』をさがせ」(『変革期の社会と九条兼実』勉誠出版、二〇一八年)等参照。

(29) 寛文御写本は『本朝通鑑』編輯用に蒐集された国書類で、林家からの献納
(注(28) 拙稿参照)。例えば『迎陽記』一三冊。

(30) 但、特定しえぬものも一定数存在する。これは誤記や双方とも原本でないこ
とによる書写過程での誤脱に起因するかと推する。あるいは將軍蔵書に関する御
文庫と御小納戸の二重性に起因するとも考えられるが、今後の課題である。

(31) 『三百藩藩主人名事典』「森川俊胤」の項等。

来歴志 所載	収書年次	登録 番号	旧御物	引継時	旧函号1 (明治)	旧函号 (大正)	家別	印譜 「紅葉山 文庫」	備 考
	文 政 11 (佐)	36054	×	-	-	120-76	佐	×	
○	寛 永 18 (御)	7065	○	在 76	甲 486	な78	秘	②	
○	文 政 11 (佐)	6864	○	在 47	甲 455	な60	秘	①	
○	文 政 11 (佐)	6865	○	在 47	甲 455	な60	佐	①	
○	承 応 3 (御)	6862	○	在 47	甲 455	な60	秘	①	
○	寛 永 20 (御)	6863	○	在 47	甲 455	な60		×	
○	天 保 7 以 前 (重)	6861	○	在 47	甲 455	な60	秘	①	
○	寛 永 20 (御)	6860	○	在 47	甲 455	な60		×	
○	文 政 11 (佐)	6870	○	在 48	甲 456	な61	佐	×	
○	享 保 8 以 前 (府)	6868	○	在 48	甲 456	な61	秘	①	
○	享 保 元 以 前 (官)	6867	○	在 48	甲 456	な61	秘	①	
○	承 応 元 (御)	6866	○	在 48	甲 456	な61		×	
○	文 政 11 (佐)	6875	○	在 48	甲 456	な61	佐	×	
○	文 政 11 (佐)	6872	○	在 48	甲 456	な61	佐	×	
○	享 保 中 (来)	6874	×	在 48	甲 456	な61		×	
○	元 文 4 (来)	6873	×	在 48	甲 456	な61		×	
○	文 政 11 (佐)	6871	×	在 48	甲 456	な61	佐	×	
○	文 政 11 (佐)	6869	×	在 48	甲 456	な61	秘	①	
○	享 保 元 以 前 (官)	6879	○	在 49	甲 457	な62		×	
	天 保 7 以 前 (重)	6882	×	在 49	甲 457	な62	秘	①	
○	享 保 元 以 前 (官)	6876	○	在 49	甲 457	な62	秘	①	
○	享 保 中 ヲ (来)	6883	○	在 49	甲 457	な62	秘	①	
○	寛 政 8 (来)	6880	×	在 49	甲 457	な62		×	
○	天 保 7 以 前 (重)	6878	○	在 49	甲 457	な62		×	
○	文 政 11 (佐)	6877	○	在 49	甲 457	な62	秘	①	
○	文 政 11 (佐)	6881	○	在 49	甲 457	な62	佐	①	
○	承 応 3 (御)	6887	○	在 50	甲 458	な63		×	
○	文 政 11 (佐)	6886	○	在 50	甲 458	な63	佐	×	
○	文 政 11 (佐)	6885	○	在 50	甲 458	な63	佐	×	
○	享 和 2 (伊)	6897	○	在 51	甲 459	な64	秘	×	
○	幕 初 (御)	6896	○	在 51	甲 459	な64		×	
○	享和2以前(日) (望)	6893	○	在 51	甲 459	な64		×	
○	幕 初 (御)	6889	○	在 51	甲 459	な64	秘	①	
○	享和2以前(日) (望)	6894	○	在 51	甲 459	な64		×	
○	天 保 7 以 前 (重)	6895	○	在 51	甲 459	な64	秘	①	
○	天 保 7 以 前 (重)	6891	○	在 51	甲 459	な64		×	
○	幕 初 (御)	6890	○	在 51	甲 459	な64	秘	①	
○	天 保 7 以 前 (重)	6892	○	在 51	甲 459	な64		×	
○	享 保 元 以 前* (官)	6888	○	在 51	甲 459	な64		×	
○	〔堅田絨蔵献〕 (来)	6899	○	在 52	甲 460	な65		×	
○	享 和 2 (伊)	6898	○	在 52	甲 460	な65		×	
○	元 文 2 (文 来) (元 文 5 (文 来))	6901	○	在 52	甲 460	な65		×	
○	文 政 11 (佐)	6904	○	在 52	甲 460	な65	佐	×	
○	元文～明和5 (書)	6902	○	在 52	甲 460	な65		×	
○	文 政 11 (佐)	6903	○	在 52	甲 460	な65	佐	×	
○	文 政 11 (佐)	6900	○	在 52	甲 460	な65	佐	×	
	文 政 11 (佐)	6908	○	在 53	甲 461	な66	佐	×	
	延 宝 7 (御)	6909	○	在 53	甲 461	な66		×	
	宝 暦 年 間 (書)	6910	○	在 53	甲 461	な66		×	
	天 保 7 ～ 元 治 2 (重 + 元)	6917	○	在 53	甲 461	な66		×	

図書寮蔵紅葉山御文庫本目録（史部）

函架 番号	現行書名	刊 写	員数	〈元治増補〉(楓山文庫)御書籍目録	
				書 名	分類
114-59	陰騭文集訓	清版 (乾隆 32 序)	1	陰騭文集訓	道家
402-93	星鳳樓帖	刊 (明 拓)	12	星鳳樓帖	藝法
403-6	為善陰騭	明版 (永 樂 17 官 版)	5	為善陰騭	雜纂
403-7	〈新修科分〉六学僧伝	五山版 (補 写)	15	六学僧伝	釈家
403-8	勸忍百箴考註	明版 (正 統 14)	2	勸忍百箴	雜纂
403-9	勸善書	明版 (永 樂 5 官 版)	11	勸善書	雜纂
403-10	官箴	刊 (木 活)	1	官箴	史職箴
403-11	〈北溪生生〉性理字義	古活字版 (寛 永)	1	性理字義	儒家
403-13	童子習諺解	朝鮮版 (古 版)	2	童子習諺解	附韓子
403-14	女訓 附：孝慈皇后馬氏伝	明版 (嘉 靖 9 官 版)	2	女訓	儒家
403-15	内訓	明版 (永 樂 3 官 版)	1	内訓	儒家
403-16	歴代君鑑	明版 (景 泰 4 官 版)	10	歴代君鑑	雜纂
403-17	〈標題註王先生〉十七史蒙求	元版	2	十七史蒙求	類書
403-18	〈程氏〉演繁露	明版 (嘉 靖 20)	8	程氏演繁露集	雜考
403-19	天工開物	江戸中期写 (寛 保 3 カ (文))	3	天工開物	雜説
403-20	博学彙書	江戸初期写	12	博学彙書	雜纂
403-21	広友論	明版	5	広友論	雜纂
403-22	警語類鈔	明版 (万 曆)	8	警語類抄〔※別本の可能性も〕	雜纂
403-24	七書直解	朝鮮版 (万 曆 銅 活 字)	12	別本七書直解	兵家
403-25	七書	江戸版 (万 治 2 野 田 弥 兵 衛 尉 版)	3	七書	兵家
403-26	十一家註孫子	朝鮮版 (万 曆 銅 活 字)	6	孫子十一家註	兵家
403-27	曆算全書	江戸中期写 (享 保 18)	46	歴算全書	天推
403-28	三略	江戸写	1	三畧	兵家
403-29	司馬法集解	朝鮮版 (万 曆 銅 活 字)	2	司馬法集解	附韓子
403-30	十一家註孫子	朝鮮版 (永 樂 7 銅 活 字)	3	孫子十一家註	兵家
403-31	歴代将鑑博議	朝鮮版 (正 統 2 銅 活 字)	9	歴代将鑑博議	兵家
403-33	類雋	明版 (万 曆 6)	28	類雋	類書
403-34	群書考索	明版 (正 徳 15, 補 写)	50	羣書考索	類書
403-35	広語	明写	8	広語	小雜
403-36	楊氏家蔵方	元版	7	楊氏家蔵方	医方書
403-37	楊氏家蔵方	宋版 (淳 熙 12 金 沢 文 庫 印)	21	楊氏家蔵方	医方書
403-38	世医得効方	朝鮮版 (銅 活 字)	9	世医得効方	医方書
403-39	決脈精要	室町写 (天 正 2)	1	脈訣精要	医脈
403-40	拯急遺方	朝鮮版 (銅 活 字)	1	拯急遺方	医方書
403-41	統易簡方論	江戸初期写 (影 金 沢 文 庫 本)	3	統易簡方論	医方書
403-42	外台秘要方	宋版 (金 沢 文 庫 印)	11	外台秘要方	医方書
403-43	鍼灸三種	室町写 (天 正 2 明 人 王 月 軒)	1	鍼灸指南	医鍼
403-44	嚴氏濟生方	宋版 (補 写)	11	濟生方	医方書
403-45	〈重広補註〉内経素問	明版 (覆 宋 版)	12	重広補註内経素問	医経
403-46	〈類証〉普濟本事方	元版	5	類証普濟本事方	医方書
403-47	蘇沈内翰良方	明版	7	蘇沈内翰良	医方書
403-48	飲膳正要	江戸中期写 (元文中幕府令松平吉治家影版本)	3	飲膳正要	医本
403-49	金園集	宋版 (紹 興 11)	1	金園集	釈家
403-50	六子全書	明版	39	六子全書	雜編
403-51	初学記	宋版 (紹 興 17, 補 写)	10	初学記	類書
403-52	類要図註本草	宋版 (元 版 補 版・補 写)	20	類要図註本草	医本
403-53	曆法新書	明版	4	曆法新書	天推
403-54	論存	明版	4	論存	天推
403-56	乾象図説	清写	1	乾象図説	天推
403-59	制勝全書	清写	4	制勝全書	兵家

来歴志 所載	収書年次	登録 番号	旧御物	引継時	旧函号1 (明治)	旧函号 (大正)	家別	印譜 「紅葉山 文庫」	備 考
	文 政 11 (佐)	6915	○	在 53	甲 461	な66	秘	①	
	幕 初 (御)	6914	○	在 53	甲 461	な66		×	
	文 政 11 (佐)	6913	○	在 53	甲 461	な66	佐	×	
	享保8～明和5 (府+書)	6912	○	在 53	甲 461	な66	秘	①	
	文 化 3 (化)	6916	○	在 53	甲 461	な66		×	
	文 政 11 (佐)	6972	○	在 57	甲 465	な70	佐	×	
	幕 初 * (御)	6974	○	在 57	甲 465	な70		×	
	天保7以前 (重)	6973	○	在 57	甲 465	な70		×	
	承 応 2* (御)	6971	○	在 57	甲 465	な70		×	
	慶 安 4 (御)	6970	○	在 57	甲 465	な70		×	
	天保7以前 (重)	6968	○	在 57	甲 465	な70	秘	①	
	承 応 元 (御)	6975	○	在 58	甲 466	な71		×	
	文 政 11 (佐)	6976	○	在 58	甲 466	な71	秘	①	
	文 政 11 (佐)	6977	○	在 58	甲 466	な71		×	
	万 治 2 (御)	6978	○	在 58	甲 466	な71	秘	①	
	享保元以前 (官)	6980	○	在 58	甲 466	な71	秘	①	
	天保7以前 (重)	6982	○	在 58	甲 466	な71		×	
	幕 初 (御)	7006	○	在 60	甲 468	な72		×	
	文 政 11 (佐)	7007	○	在 60	甲 468	な72	佐	×	
	文 政 11 (佐)	7165	○	在 60	甲 468	な72		×	
	享保元以前 (官)	7002	○	在 60	甲 468	な72		×	
	享保元以前 (官)	7004	○	在 60	甲 468	な72		×	
	文 政 11 (佐)	6999	○	在 60	甲 468	な72	佐	×	
	享保元以前 (官)	7001	○	在 60	甲 468	な72		×	
	天保7以前 (重)	7003	○	在 60	甲 468	な72		×	
	天保7以前 (重)	7000	○	在 60	甲 468	な72		×	
	文 政 11 (佐)	6998	○	在 60	甲 468	な72	佐	×	
	幕 初 (御)	6997	○	在 60	甲 468	な72		×	
	享 保 14 (日)	7015	○	在 62	甲 470	な73		×	
	宝 暦 年 間 (書)	7017	○	在 62	甲 470	な73	秘	①	
	文 政 11 (佐)	7018	×	在 62	甲 470	な73	佐	①	
	文 政 11 (佐)	7016	○	在 62	甲 470	な73	佐	×	
	文 政 11 (佐)	7014	○	在 62	甲 470	な73	佐	×	
	天保7以前 (重)	7009	×	在 62	甲 470	な73	秘	×	
	幕 初 (御)	7010	○	在 62	甲 470	な73		×	
	承 応 2 (御)	7011	○	在 62	甲 470	な73		×	
	寛 文 11 (御)	7012	○	在 62	甲 470	な73		×	
	文 政 11 (佐)	7013	○	在 62	甲 470	な73	佐	×	
	〔徳川吉宗期〕 (書)	7053	○	在 65	甲 473	な74	秘	①	
	天保7～元治2 (重+元)	7049	○	在 65	甲 473	な74	秘	①	
	天保7～元治2 (重+元)	7050	○	在 65	甲 473	な74	秘	①	
	天保7～元治2 (重+元)	7051	○	在 65	甲 473	な74	秘	①	
	天保7～元治2 (重+元)	7052	○	在 65	甲 473	な74	秘	①	
○	元 文 5 (吉)	6963	○	在 67	甲 475	な75	秘	①	
○	元 文 5 (吉)	6648	○	在 68	甲 476	な76	秘	①	
○	元 文 5 (吉)	7059	○	在 71	甲 482	な77	御	×	
○	元 文 5 (吉)	7058	○	在 71	甲 482	な77	御	×	
	文 化 14以前 (右)	7057	○	在 71	甲 482	な77	御	×	
○	享保8以前 (府)	7071	○	在 79	甲 489	は26		×	
○	正 保 3 (御)	7072	○	在 80	甲 490	は57		×	
○	文 政 11 (佐)	7074	○	在 82	甲	×	貴	①	
○	幕 初 (御)	6884	○	在 49	甲 457	貴	秘	①	
	天保7以前 (重)	7070	×	在 78	甲 488	さ38		×	

函架 番号	現行書名	刊 写	員数	〈元治増補〉(楓山文庫)御書籍目録	
				書 名	分類
403-61	冲虚真經 一名：列子	明版 (元 禄 15 補 写)	2	列子	道家
403-62	〈纂因増新群書類要〉事林広記	元版 (至 元 17)	10	事林広記	類書
403-63	〈天台陳先生類編〉花果卉木全芳備祖	宋版	8	全芳備祖	類書
403-64	玄々碁經	明版 (明 初)	6	玄々碁經	藝碁
403-65	泚泚百金方	清写	16	泚泚百金方	兵家
403-117	〈太平惠民〉和剂局方	元版 (丙 午 年)	12	太平惠民和剂局方	医方書
403-118	〈新刊〉婦人良法補遺大全	室町写 (模 明 正 德 版)	8	婦人大全良法	医婦
403-119	本艸衍義	宋版 (慶 元 元 補 版)	3	本草衍義	医本
403-120	幼幼新書	明写	20	幼幼新書	医小
403-122	鍼灸捷徑	明版 (後人「元和十四年刻」搨刻)	5	鍼灸捷徑	医鍼
403-123	六韜諺解	江戸初期写	2	六韜諺解	国附子
403-124	稗存	明版	5	稗存	雜纂
403-125	雲谷臥餘	清版 (順 治)	11	雲谷臥餘	雜説
403-126	古今印則	明版	4	古今印則	藝篆
403-127	莊義要刪	明版 (万 曆 8 序)	10	莊義要刪	道家
403-129	剪灯新話句解	朝鮮版	2	剪灯新話	小異
403-131	孫子大文	朝鮮版 (万 曆 21)	3	孫子大文	附韓子
404-1	傷寒六書	明版 (嘉 靖)	4	傷寒六書	医傷
404-3	〈新刊〉傷寒撮要	明版	2	傷寒撮要	医傷
404-4	〈注解〉傷寒論	明版	1	附：注解傷寒論	医傷
404-5	〈増註太平惠民〉和剂局方	朝鮮版	6	増註太平惠民和剂局方	医方書
404-6	伝信尤易方	明版	8	伝信尤易方	医方書
404-7	原病集	明版 (崇 禎 6)	12	原病集	医治
404-8	程氏医穀	明版 (万 曆)	32	程氏医穀	医治
404-9	〈濟世内外〉經驗全方	明版 (成 化)	5	經驗全方	医方書
404-10	医門秘旨	明版 (万 曆 6)	4	医門秘旨	医治
404-11	医論問答	明版 (嘉 靖)	1	医論問答	医方論
404-12	三因極一病証方論	室町写 (室 町 末)	7	三因極一病証方論	医方論
404-13	測門海鏡	写 (明 写 カ)	6	測門海鏡	天算
404-14	觀象玩占	清写	20	觀象玩占	術占候
404-15	宝元天人祥異書	写 (清 写 カ)	9	宝元天人祥異書	術占候
404-16	太微經	明版	1	太微經	術数
404-17	宋楊輝算法	朝鮮版 (宣 德 8)	3	算法	天算
404-18	治痘大成集	明版	2	治痘大成集	医小
404-19	外科精要	江戸初期写	3	外科精要	医外
404-20	〈新鍔鰲頭復明〉眼方外科神驗全書	明版 (万 曆 19)	2	眼方全書	医眼
404-21	馬經全書	明版	3	馬經	医附
404-22	康熙永年曆法	清版 (補 写)	33	康熙永年曆法	天推
404-23	奇文不載酒正編	江戸中期写 (享 保 16 細井知慎自筆・細井知文篆書)	43	奇文不載酒正編	国雜
404-24	数雅	江戸末期写	15	数雅	国附經
404-25	威雅	江戸末期写	17	威雅	国附經
404-26	名雅	江戸末期写	10	名雅	国附經
404-27	彩雅	江戸末期写	8	彩雅	国附經
404-28	群書治要	古活字版 ((元 和 2) 銅 活 字)	47	羣書治要	儒家
404-29	群書治要	古活字版 ((元 和 2) 銅 活 字)	47	羣書治要	儒家
404-30	大蔵一覽集	古活字版 (慶 長 20 銅 活 字)	11	大蔵一覽	釈家
404-31	大蔵一覽集	古活字版 (慶 長 20 銅 活 字)	11	大蔵一覽	釈家
404-32	大蔵一覽集	古活字版 (慶 長 20 銅 活 字)	10	大蔵一覽	釈家
452-9	太平御覽	明版 (万 曆 20 活 字)	200	太平御覽	類書
455-4	五倫書	明版 (正 統 12)	62	五倫書	儒家
460-1	道蔵經	明版	4115	道蔵經	道家
500-5	世説新語	宋版	3	世説新語	小雜
511-38	淳化閣法帖	刊 (国 板 カ)	10	淳化閣法帖	藝法

来歴志 所載	収書年次	登録 番号	旧御物	引継時	旧函号1 (明治)	旧函号 (大正)	家別	印譜 「紅葉山 文庫」	備 考
○	幕 初 (駿来)	7064	○	在 74	甲 485	さ37	秘	②	
○	幕 初 (駿来)	7054	○	在 66	甲 474	貴		×	
○	幕 初 (駿御来)	7055	○	在 69	甲 477-78	貴		×	
	文 化 3 (化)	6995	×	在 59	甲 467	た35		×	
	享保元以前 (官)	6994	×	在 59	甲 467	た35		×	
	天保7以前 (重)	6993	○	在 59	甲 467	た35		×	
	天保7～元治2 (重+元)	6992	○	在 59	甲 467	た35		×	
	正 保 3 (御)	6991	○	在 59	甲 467	た35		×	
	天保7以前 (重)	6990	×	在 59	甲 467	た35		×	
	文 化 5 (化)	6989	×	在 59	甲 467	た35		×	
	文化5/文化11 (化)	6988	×	在 59	甲 467	た35		×	
	寛 文 2 (御)	6987	×	在 59	甲 467	た35		×	
	文 政 11 (佐)	6986	○	在 59	甲 467	た35	佐	×	
	慶 安 4* (御)	6985	×	在 59	甲 467	た35		×	
	文 政 11 (佐)	6984	○	在 59	甲 467	た35	佐	×	
	文 政 11 (佐)	6983	×	在 59	甲 467	た35	佐	×	
	文 政 11 (佐)	6996	×	在 59	甲 467	た35	佐	×	
	享 保 18 (商)	7008	○	在 61	甲 469	た36		×	
	万 治 3 (御)	7031	○	在 63	甲 471	た37		×	
	文 政 11 (佐)	7030	○	在 63	甲 471	た37	佐	×	
	正 保 2 (御)	7029	×	在 63	甲 471	た37		×	
	承 応 元 (御)	7028	○	在 63	甲 471	た37		×	
○	享和2以前(日) (望)	7027	○	在 63	甲 471	た37		×	
○	享和2以前(日) (望)	7026	○	在 63	甲 471	た37	秘	×	
	明 曆 2 (御)	7025	○	在 63	甲 471	た37		×	
	承 応 元 (御)	7024	○	在 63	甲 471	た37	秘	③	
	文 政 11 (佐)	7023	×	在 63	甲 471	た37	佐	×	
	明 曆 3 (御)	7022	○	在 63	甲 471	た37		×	
	延 宝 7* (御)	7021	○	在 63	甲 471	た37		×	
	文 化 5 (化)	7020	○	在 63	甲 471	た37	秘	①	
	天保7以前 (重)	7019	○	在 63	甲 471	た37	秘	①	
	享保元以前* (官)	7032	○	在 64	甲 472	た38		×	
	承 応 3 (御)	7033	○	在 64	甲 472	た38		×	
	文 政 11 (佐)	7034	○	在 64	甲 472	た38	佐	×	
	文 政 11 (佐)	7035	○	在 64	甲 472	た38	佐	①	
	寛 文 11 (御)	7036	○	在 64	甲 472	た38	秘	①	
	享保8以前 (府)	7037	○	在 64	甲 472	た38	秘	①	
	文 政 11 (佐)	7038	×	在 64	甲 472	た38	秘	①	
	文 政 11 (佐)	7039	×	在 64	甲 472	た38	秘	①	
	明 曆 元 (御)	7040	×	在 64	甲 472	た38	秘	①	
	天保7以前 (重)	7041	×	在 64	甲 472	た38	秘	①	
	文 政 11 (佐)	7042	○	在 64	甲 472	た38		×	
	享保元以前 (官)	7043	×	在 64	甲 472	た38	秘	①	内閣文庫本『莊子翼』(子235-5)と 泣別れ
	文 政 11 (佐)	7044	○	在 64	甲 472	た38	佐	×	
	享保8～明和5 (府+書)	7045	○	在 64	甲 472	た38		×	
	正 徳 3 (桜)	7046	×	在 64	甲 472	た38		×	
	文 政 11 (佐)	7047	○	在 64	甲 472	た38	佐	×	
○	〔徳川吉宗期〕 (書)	7048	○	在 64	甲 472	た38	秘	①	
○	幕 初 (駿御来)	7056	○	在 70	甲 479-81	た39	秘	①	
○	寛 政 中 (来)	7060	×	在 72	甲 483	た40		×	
○	幕 初 (駿御)	7061	○	在 73	甲 484	た41		×	

函架 番号	現行書名	刊 写	頁数	〈元治増補〉(楓山文庫)御書籍目録	
				書 名	分類
511-41	大学衍義	朝鮮版 (宣 德 9 銅 活) (市 川 三 亥 補 写)	15	大学衍義	儒家
550-2	群書治要	鎌倉写 (金 沢 文 庫 印)	48	羣書治要	儒家
550-5	太平御覽	宋版 (鈔 金 沢 文 庫 配 印)	114	太平御覽	類書
554-32	手臂録	清写	4	手臂録	兵家
554-33	古今兵略	明版	3	古今兵畧	兵家
554-34	練兵纂要	写 (清 写 カ)	3	練兵纂要	兵家
554-35	練兵実記	明写	12	練兵実記	兵家
554-36	太乙武略集要	明写 (明 藍 格 鈔 本)	6	太乙武略集要	兵家
554-37	心略	明版	6	心略	兵家
554-38	神機致理兵法心要全集	清写	5	神機致理兵法心要全集	兵家
554-39	神機制敵太白陰経	清写	4	神機制敵太白陰経	兵家
554-40	三儒類要	明版 (万 曆 6 跋)	3	三儒類要	儒家
554-41	心経附注	朝鮮版	2	心経附注	儒家
554-42	朱子語略	明版 (弘 治 4) (南 京 国 子 監 重 版)	2	朱子語略	儒家
554-43	延平李先生師弟答問	朝鮮版	2	延平問答	儒家
554-44	法言纂注	明版	6	法言纂注	儒家
554-45	傷寒明理論	明版	5	傷寒明理論	医傷
554-46	崇禎曆書	清写	120	西洋曆経	天算
554-47	天都閣蔵書	明版	4	天都閣蔵書	雜編
554-48	李氏叢書	明版	6	李氏叢書	雜編
554-49	千百年眼	明版	6	千百年眼	雜纂
554-50	玉府鈎玄集	明版	6	玉府鈎玄集	雜纂
554-51	濟生抜粹方	元版 (補 写)	10	濟生抜粹方	医方書
554-52	寿親養老新書	朝鮮版	3	寿親養老新書	医治
554-53	西溪叢語	明版 (崇 禎 6)	2	西溪叢語	雜考
554-54	松絃館琴譜	明版 (万 曆)	2	松絃館琴譜	藝琴
554-55	墨妙纂	江戸末期写	2	墨妙纂	藝書
554-56	法書要録	明版	4	法書要録	藝書
554-57	三命通会	明版 (万 曆)	12	三命通会	術命
554-58	天文秘事要略	清写	2	天文秘事要畧	術占候
554-59	天象玄機	清写	8	天象玄機	術占候
555-1	二十家子書	明版 (万 曆 6)	16	二十家子書	雜編
555-2	北堂書鈔	明版 (万 曆)	20	北堂書鈔	類書
555-3	龍筋鳳髓判注	明版 (万 曆 13)	2	龍筋鳳髓	類書
555-4	青藤山人路史	明版	1	青藤山人路史	小雜
555-5	芸齋凶駁清言	明版	4	凶駁清言	小異
555-6	〈王子年〉拾遺記	明版	2	拾遺記	小異
555-7	前定録	明版	2	前定録	小異
555-8	広博物志増刪	明版 (崇 禎)	4	広博物志増刪	小瑣
555-9	古今寓言	明版 (万 曆)	4	古今寓言	小瑣
555-10	禪宗博覧	明版	1	禪宗博覧	釈家
555-11	道德経解	明版 (万 曆 16)	2	道德経解	道家
555-12	老子翼	明版 (万 曆)	3	(老莊翼7冊のうち)	道家
555-13	文昌大洞仙経注	明版 (万 曆 28)	6	文昌太洞仙経	道家
555-14	真詮	明版 (嘉 靖)	1	真詮	道家
555-15	〈慈溪〉黄氏日抄分類	明版 (正 徳 14, 補 写)	20	黄氏日抄	儒家
555-16	簡易辟瘟方	朝鮮版 (銅 活 字)	1	簡易辟瘟方	附韓子
555-17	〈標題句解〉孔子家語	古活字版 (慶 長 4)	4	標題句解孔子家語	儒家
555-18	〈大徳重校〉聖濟総録 附：抜書1巻	朝鮮写	205	聖濟総録	医治
555-19	太平聖恵方	江戸後期写 (寛 政 6 影 宋 本)	51	太平聖恵方	医方書
555-20	文公家礼儀節	朝鮮版 (嘉 靖 34)	4	家礼儀節	経礼雜

来歴志 所載	収書年次	登録 番号	旧御物	引継時	旧函号1 (明治)	旧函号 (大正)	家別	印譜 「紅葉山 文庫」	備 考
○	幕 初 (駿来)	7062	○	在 73	甲 484	た41	秘	×	
○	幕 初 (駿来)	7063	○	在 73	甲 484	た41	秘	×	
○	承 応 元 (御)	7066	×	在 77	甲 487	た42	秘	②	
○	天 保 7 以 前 (重)	7068	×	在 77	甲 487	た42	秘	②	
	寛 永 18 (御)	7067	×	在 77	甲 487	た42	秘	②	
○	明 和 元 (辰日(来))	-	-	在 81		-		-	

典拠略号

- 駿 駿府御文庫本たるによる
- 慶 慶長御写本たるによる
- 桜 桜田御文庫本たるによる (『官』第6冊)
- 佐 佐伯毛利本たるによる
- 前 前田綱紀献本
- 新 新見正興献本
- 近 近藤守重献本
- 吉 徳川吉宗移入本
- 伊 伊良子長門守献本
- 望 望月三英旧蔵書 (孫三作献本)
- 本 御本日記
- 来 御書籍来歴志
- 始 御文庫始末記
- 日 御書物方日記
- 御 御文庫目録
- 官 官庫書籍目録 (1~5)
- 府 官府書目
- 書 御書目録
- 重 重訂目録
- 元 元治目録
- 実 徳川実紀
- 寛 寛政重修諸家譜
- 文 御代々文事表
- 右 右文故事
- 昆 昆陽漫録
- 人 人見竹洞全集所収紅葉山文庫日録
- 没 文政11幕府没収本
- 芸 古芸余香
- ・ それと思しき書あり (確定に非ず)
- ※ 〔徳川吉宗期〕は、『書』に有徳院御小納戸より出たとあり、上記史料等から収書年次をそれ以上明らかにできなかったもの。
- ※ 〔堅田絨蔵献〕は、献納の事実は判明しながら、正確な年次が未特定なもの。

函架 番号	現行書名	刊 写	員数	〈元治増補〉(楓山文庫)御書籍目録	
				書 名	分類
555-21	理学類編	朝鮮版	2	理学類編	儒家
555-22	自警編	朝鮮版 (銅活字)	5	別本自警編	雜纂
555-23	響琴斎帖	明版 (天啓7刻 明治6一部焼失)	4	響琴斎法帖(5帖)	藝法
555-24	暝雨山房帖	明版 (明治6一部焼失)	1	暝雨山房帖(2帖)	藝法
555-25	鷺群帖	刊 (明刻カ)	1	鷺群帖	藝法
-	図書集成	清版 (雍正4銅活(初印))	9996	図書集成	類書

160部 16132点

現存159部 6136点

来歴志所載66部 15385点

同現存65部 5389点

分類略号

儒家	儒家類	
兵家	兵家類	
法家	法家類	
農家	農家類	
医經	医家類	經論之属
医方論	医家類	方論之属
医脈	医家類	脈法之属
医治	医家類	治法之属
医鍼	医家類	鍼灸之属
医雜	医家類	雜治之属
医方書	医家類	方書之属
医本	医家類	本草之属
医傷	医家類	傷寒之属
医婦	医家類	婦人科之属
医小	医家類	小兒科之属
医外	医家類	外科之属
医眼	医家類	眼科之属
医附	医家類	附録之属
天推	天文算法類	推歩之属
天算	天文算法類	算書之属
術数	術数類	数学之属
術占候	術数類	占候之属
術相	術数類	相宅相墓之属
術占卜	術数類	占卜之属
術命	術数類	命書之属
術陰	術数類	陰陽五行之属
藝書	藝術類	書画之属
藝法	藝術類	法帖之属
藝琴	藝術類	琴譜之属
藝篆	藝術類	篆刻之属
藝碁	藝術類	碁譜之属
譜録	譜録類	
雜学	雜家類	雜学之属
雜考	雜家類	雜考之属
雜說	雜家類	雜說之属
雜品	雜家類	雜品之属
雜纂	雜家類	雜纂之属
雜編	雜家類	雜編之属
類書	類書類	
小雜	小説類	雜事之属
小異	小説類	異聞之属
小瑣	小説類	瑣語之属
积家	积家類	
道家	道家類	
附韓子	附存部	韓人著撰類子之属
国附經	国書部	附録經類
国附子	国書部	附録子類
經礼雜	經部	礼類雜礼之属
史職箴	史部	職官類官箴之属
国雜	国書部	雜類

表1 「桜田御本」と『官庫書籍目録』

書名 注記のうち特記事項	員数	『日記』年月日 (初出のみ)・番号 又は『御書目録』 巻次・番号・項目		『官庫書籍目録』における		
		冊次	項目	番号	備考	
三才図会	160	享保4・5・28		6	桜田御文庫	
三代実録	20	享保7・正・6		6	御小納戸	1 7冊本 +13冊本で20冊カ
日本後紀	10	享保7・正・13	5-32	6	当申五月六日	
書経 集註	10	享保7・正・19	1-19	6	御小納戸	6カ (御小納戸本1番にも10冊本書経あり)
通鑑綱目 和板	106	享保7・正・20	2-50			『官庫書籍目録』全体を通して見えず
扶桑略記	8	享保7・正・28	5-33	6	当申五月六日	
神社考	6	享保7・2・8	5-56	6	御小納戸	2
山城名勝志 附図	30 12	享保7・3・11 享保7・4・7	5-56	6	御小納戸	4
令義解	4	享保7・3・26	5-34	6	御小納戸	2
枕草子抄	6	享保7・4・4	5-41	6	御小納戸	3
平家物語 長府本	20	享保7・4・8	5-35	6	当申五月六日	
桃花薬葉	1	享保7・5・3	5-35	6	当申五月六日	
礼記集註 <small>(享保7-9) 五経集註之内</small>	20	享保7・5・3	1-19	6	御小納戸	6カ
四書集註	10	享保7・5・4	1-1			『官庫書籍目録』中複数部あり、特定不能
東鑑	26	享保7・6・3	5-47	6	御小納戸	3
鎌倉年中行事 全	1	享保7・6・3	5-35	6	当申五月六日	
帝鑑図説	6	享保7・7・7	5-6	6	御小納戸	1
帝範	2	享保7・7・7	5-6	6	御小納戸	1 『孔子家語』と合せて3部で1帙という
臣軌	2	享保7・7・7	5-6	6	御小納戸	1
貞観政要 和板	10	享保7・8・20	2-74	6	御小納戸	1
浅井軍記	2	享保7・9・8	5-51	6	当申五月六日	
古老物語	6	享保7・9・9		6	御小納戸	3
信長記 板本	5	享保7・9・9		6	御小納戸	3
東国輿地勝覧	57	享保7・9・16	4-18	6	御小納戸	8
大明会典	240	享保7・10・26	2-79	6	桜田御文庫	
駿府政事録	4	享保7・10・28	御-6	6	当申五月六日	
明德記 板本	1	享保7・11・7	5-50	6	御小納戸	3
北山行幸記 書本	1	享保7・11・7	5-50	6	当申五月六日	
肥陽軍記 書本	3	享保7・11・7	5-50	6	当申五月六日	
康富記 書本	20	享保7・11・7	5-50	6	当申五月六日	
大内義隆記 書本	1	享保7・11・7	5-50	6	当申五月六日	
細川頼之記 書本	1	享保7・11・7	5-50	6	当申五月六日	
細川両家記 書本	2	享保7・11・7	5-50	6	当申五月六日	
応仁記 板本	1	享保7・11・7	5-50	6	御小納戸	3
応仁別記 書本	1	享保7・11・7	5-50	6	当申五月六日	
日吉御元服記 書本	1	享保7・11・7	5-50	6	当申五月六日	
穴太記 書本	1	享保7・11・7	5-50	6	当申五月六日	
三好家譜 書本	1	享保7・11・7	5-50	6	当申五月六日	
三好記 書本	1	享保7・11・7	5-50	6	当申五月六日	
園大〔太〕曆 書本	33	享保7・11・7	5-48	6	当申五月六日	
武者物語 板本	1	享保7・11・19	5-51	6	御小納戸	3
太閤記	19	享保7・12・15	5-52	6	御小納戸	3
蒲生記 書本	3	享保8・正・18	5-52	6	当申五月六日	
武徳大成記 書本	31	享保8・正・27	御-3	6	御小納戸	6
家忠日記増補	25	享保8・2・4	御-4	6	当申五月六日	
類聚三代格	2	享保8・2・26	5-34	6	当申五月六日	
砂石集〔沙石集〕	6	享保8・3・25	5-40	6	御小納戸	3
類聚国史	28	享保8・4・15	5-32 ⁽³⁾	6	当申五月六日	
撰集抄	7	享保8・4・20	5-73	6	御小納戸	4
积日本記	15	享保8・8・16	5-31	6	御小納戸	2
旧事記 外題先代旧事本記	5	享保8・8・16	5-31	6	御小納戸	2
詩経 五経集註之内	8	享保10・5・26	1-21	6	御小納戸	6カ
創業記 創業期考異	6	元文4・5・20		6	当申五月六日	※『日記』冊数不記。目録により補う。
四書集註 和版	6	巻3・1番・儒書		6	御小納戸	6:(「四書」として著録)
五経集註	58	巻3・14番・儒書		6	御小納戸	6:(「五経」として著録)
同〔左伝〕林註 林堯叟註 和版	25	巻3・35番・儒書				『官庫書籍目録』全体を通して見えず
大学衍義 和版	20	巻3・42番・儒書		6	御小納戸	1
同〔大学〕衍義正補 衍義十二冊 補四十冊	60	巻3・43番・儒書		6	当申五月六日	-
小学句読 和版	4	巻3・53番・儒書				『官庫書籍目録』全体を通して見えず
通鑑綱目 和版 正編 前編 続編	106	巻4・33番・史類				『官庫書籍目録』全体を通して見えず